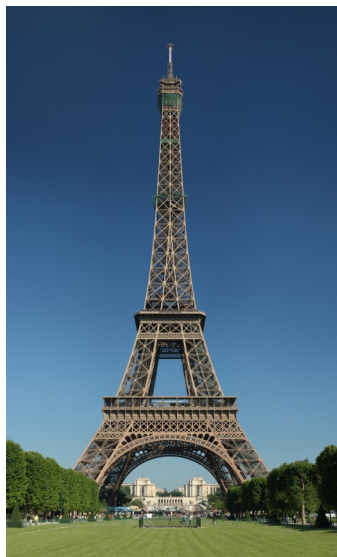




鉄の文化遺産 エッフェル塔と通天閣

今回は、19世紀から20世紀のお話をしましょう。1889年(明治22)年、フランス革命100周年を記念してパリで万国博覧会が開催されました。この時のランドマークとして建設されたのがエッフェル塔です。設計者は鉄骨の名手、アレクサンドル＝ギュスターブ＝エッフェルでした。彼は1884年(明治17)年、アメリカ合衆国ニューヨークの「自由の女神」像の設計も担当しました。いずれも鉄骨をリベットで止める技法で作られています。

1903(明治36)年、大阪で開催された第5回内国勸業博覧会では、パリ万博を模倣、ランドマークとして凱旋門とエッフェル塔をモデルに作られたのが、初代通天閣です。



▼パリ万博はフランス革命の発端とされるバスティーユ襲撃100周年となる年に開催されました。この博覧会にあわせてエッフェル塔が建設され、高さは312m、パリのシンボルとなります。建設には賛否があり、文豪モーパッサンは、毎日1階のレストランに通っていました。「ここにいれば、あの忌々しい塔を見ないで済む」と言って。

▼素材は鋼鉄と鋳鉄の中間の性質を持つれんてつ錬鉄で、それぞれリベットで止めています（リベットについて後日詳述）。



▼錬鉄は、鋼鉄の大量生産が行われる前、反射炉で作られる炭素含有量の少ない鉄のことで、19世紀には軍艦やレール、そして鉄骨を製造するのにつかわれていました。エッフェルは、大規模な鉄骨構造物を多く手掛けています。このエッフェル塔を見て感銘を

受けたのが、大阪商工会議所の土井通夫でした。彼は第4次パリ万博の設計を活用して、大阪での内国勸業博覧会のランドマークとしてエッフェル塔を参考にしたタワーを設計するよう、建築家設楽貞雄に依頼します。

▼設楽は、上部構造はエッフェル塔、土台はパリエトワール凱旋門という建物を設計、大阪の儒学者藤沢南岳が「通天閣」と名付けました。

これが大阪のエッフェル塔 通天閣だ

▼右の写真をご覧ください。これが、1912年に建設された初代の通天閣です。足元は凱旋門、上部はエッフェル塔という、今となっては不思議な建築です。

▼この通天閣、高さは俗に100尺(91m)と言われていましたが、実際には75mです。ちなみに、現在の二代目通天閣は、避雷針部分を除いてちょうど100mです。

▼初代通天閣の足許には、当時としては珍しい本格的な遊園地、ルナパークが開業しました。ニューヨークのコニーアイランド・ルナパークをモデルにして作られました。通天閣を中心に放射状の道が展開し、様々な出し物や乗物がありました。



ルナパーク（戦前の姿）

▼ルナパークは1923（大正12）年閉鎖、通天閣は戦争中の1943（昭和18）年、足元の映画館から出火し全焼。その後解体され、金属は供出されました。

▼現通天閣は昭和31（1956）年に再建された二代目です。通天閣の上から見ると、今でも恵美須町側から通天閣に向かって放射状の道路が残っています。これがルナパークの名残なのです。